



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会
2014/03/09(日)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 138

「一寸一云」

2013ウィンターカップを終えて

札幌山の手高校 上島 正光

今年のチームも試合毎にスタートメンバーが定まらない状態、特に肝心要のチャンスメーカーでありムードメーカーとしてのポイントガード。技術、精神面が要求され、

- ① 野の広いパスワーク
- ② 突破力のあるドライブ
- ③ ドライブは勿論アウトサイドのシュート
- ④ 粘り強いディフェンス
- ⑤ ボールに対する執着心
- ⑥ その場面で適格な指示や味方を鼓舞する声
- ⑦ 適格な状況判断
- ⑧ チームメイトからの信頼等

が要求されると考えられる。そのため、身長に関係なく、チーム内で一番センスのあるプレイヤーに委ねるべき。ポイントガードでチームカラーが決まってくると云われる所以である。ここが確りしないと夜もおちおち眠れない。加えて、センタープレイヤーも決められない状態が1年(選手層が厚い訳ではない)。

ポストプレイヤーとしての役割

- ① 得点
- ② リバウンド
- ③ ディフェンス
- ④ パス
- ⑤ スクリーン
- ⑥ 声
- ⑦ テイクファール
- ⑧ テイクチャージ

が考えられる。

試合では、“勝つためにはディフェンス。優勝するにはリバウンド”と云われるぐらい、得点と並べて重要。斉藤麻、佐藤奈以外に①②③の何れか一つでも、ある程度計算できるポストプレイヤーが育ってくれたらという思いで1年。

最も重要な縦のラインが不安定で、良いときと悪いときの背中合わせの試合が多い。斉藤麻と佐藤奈の2人の調子如何によるチーム事情。ウィンターカップ予選の決勝で斉藤麻が前の試合で足首を捻挫して万全ではないにしても、決勝を1点差で辛くも出場権を得ての全国大会出場。

事前対応

○ポイントガードを誰にするか、決してセンスがあるとは云えないが、

- ①パスの範囲が広い
- ②ゴールに向かうドライブ
- ③1対1のディフェンスに粘りがある
- ④接触プレイが弱くない

と云うことで1年の井上を9月から起用して試みる。ガード陣のなかでは一番安定した働きができるようになり、経験（インターハイではベンチにも入っていない）がなく多少の不安はあるが井上で固定して挑むことにした。

○今まで斉藤麻、佐藤奈の2人のポストプレイが得点源であったが2人とも3Pシュートも含むアウトサイドプレイも身に付いてきた。全国で戦うには、インサイドとしては、サイズ的には低く、将来2、3番ポジションで活躍できるプレイヤー。175cm以上のインサイドプレイヤーを起用すべく、2年の尾崎（176）1年の久米（175）、米谷（177）で色々と試してきたが、身体の強さと運動能力を期待して尾崎を起用することにした。

○プレイ的には、毎回のことながら、長身者に対する備とドライブに対するディフェンスを中心にマンツーマンディフェンスを主体に2-1-2ゾーンディフェンス、オールコートプレスディフェンスを用意する。

試合結果

○1回戦 一関学院（岩手県）

注意点：No.4（178）のポストプレイに対するDFと3-2ゾーンディフェンスの対応
4パターンを用意。

スタートメンバー：

山の手 斉藤麻（173、2年）、佐藤奈（175、2年）、塩野（158、2年）、
尾崎（176、2年）、井上（163、1年）

一関 No.4:178 No.5:164 No.6:166 No.8:166 No.14:163

第1ピリオド

山の手、ハーフコートマンツーマンDF、一関、3-2ゾーンDFでスタート。
出だしからイージーシュートミス、パスミス等が続き、なかなか得点へ結び付けることができず、6分経過しても8-4と波に乗れないゲーム展開。
一関タイムアウト後3Pシュート、速攻により連続で得点され8-9。
南部3Pシュート、米谷のフリースローで12-11のロースコア。

第2ピリオド

3分過ぎに連続ハイローポストで22-17。西尾が4分過ぎにコートに入ってきて3Pシュートを皮切りに12得点、チームも連続14得点と2:40には、37-17、ようやくDF・OFともに歯車がかみ合い始め前半42-19。

第3ピリオド

No.10に3Pシュートを許すが西尾3Pシュートで直ぐ戻す。ハイローポスト合わせのシュートとコンビネーションプレイで3分過ぎには、49-24。
このピリオドも斉藤麻のゴール下シュート、3Pシュートで連続10得点し、一気に引き離し69-33。

第4ピリオド

点差もついたのでメンバー交替をしてゲームに臨んだ結果得点が伸びず、15得点で84-47、試合を終える。No.4を8点に押さえることができたが、3-2のゾーンアタック、ベースラインカットの際も含めてインサイドのフロア、ボディーポジションの取り方に課題

○2回戦 岐阜女子（岐阜県）

注意点：No,7（187）のポストプレイに対するダブルチーム DF

アウトサイドプレイヤーへのプレッシャーDF とドライブへのヘルプ

スタートメンバー：

山の手 齊藤麻、佐藤奈、尾崎、三塚（161、3年）、井上

岐阜女子 No,4:165 No,5:165 No,6:166 No,7:187 No,8:172

第1ピリオド

両チーム、マンツーマンDFでスタート。No,7のポスト、ダブルチームをかわされ先制されるも佐藤奈のゴール下で返す。中盤まで互いにミスが続く、又ピックスクリーンに対するオーバーアンダーDF。特にユーザーのDFのフロアポジションが悪く幾度となく攻められる。米谷（177、1年）が5分から交替して連続2本決めて8-8とする等して7得点するも、得点が伸びず13-16。

第2ピリオド

フリースローのリバウンドを取られ15-20から連続3Pシュートを決められ、また連続4回のパスミスから一気に13得点連続で決められ、15-33となる。その後もドライブ、速攻とイージーシュートを決められ、残り4分には17-39と完全に岐阜女子ペースとなり終盤、佐藤奈、南部の連続3Pシュートも含めて、連続8得点するも前半29-45の大量失点。

第3ピリオド

16点差を縮めなければならず、オールコートのマンツーマンDFを指示するも、No,5に3Pシュートを決められ、さらにカッティングからのゴール下シュートにファールをして、フリースロー2本を決められ逆に点差が広がる。プレスDFをすどころか、ドライブシュートに対して、ヘッジ、ヘルプもなしにイージーシュートを与える。DFリバウンドもかなり取られ、セカンドチャンスでの得点を許すなど、一方的なゲーム展開。わずか佐藤奈のドライブから米谷へアシストをして連続ゴールをしたのが唯一のプレイで44-70の一方的な試合。

第4ピリオド

このピリオドも最初からDFリバウンドを取られ、ドライブに対してファールとフリースローの得点を与える。7:18にタイムアウトを取り、ヘルプDF、リバウンドを指示する。岐阜女子、メンバーを総入れ替え。プレスのマッチアップが中途半端でプレスダウンから簡単にシュートを決められ、5:10にはボールを奪われ、ノーマークシュートを決められ、この試合最大の51-84、33点差となる。その後も同じような展開で68-94の完敗。

寸評

岐阜女子は180cm2枚を擁する昭和学院（インターハイ準優勝）を準決勝で破り決勝に進んで桜花学園と対戦する。センター、ローヤシンが第1ピリオドで3ファールをし、ベンチに退いて点差がついたが、後半再びコートに戻って追い上げ、あわや逆転かと思われるような粘りのある試合内容。確かに力の差はあるが、山の手としては、これほどまでに、ディフェンス、リバウンドに圧倒的な差があるとは、の感。

齊藤麻と佐藤奈のチーム、佐藤奈は33得点取ったが、齊藤麻が僅か2得点、センター尾崎が0点と内容の乏しい2回戦ではあったが、1年のポイントガードの井上とセンターの米谷に明るい兆しが見えたのがせめてもの救い。

この2年間内容の伴わない試合展開が多かったが、一番の要因は、ディフェンス、リバウンドに難があったので、“勝つにはディフェンス。チャンピオンになるにはリバウンド”を確り構築し再び全国にチャレンジ。